

昭和初年三月十日 第一巻出版
平成元年四月十日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 神 第30巻第4号



俳句雑誌[おき]

4
月号

沖
発行所

四ノツト

能村 研三

三月十日

正確は時につまらぬ白襖

劇場を「小屋」と呼びゐて冬ぬくし

切山椒五十路の満つる年なれや

罇徽の無き餅といふひ弱さや

三月十日のNHKニュースで、東京大空襲の仮埋葬地を追い続ける女性カメラマンの姿が映し出された。死者が多すぎて火葬出来ず、公園などに仮埋葬地として埋められたそうだが、その埋もれかかつてしまった歴史的事実を調べながら写真を撮っている若い女性カメラマンなのである。そのカメラマンは、取材中にある遺族に会った。その遺族の方は、東京の空は火の海で、父と弟の遺体を公園で見つけたことを語っていた。仮埋葬されたのは何万という人の数で、仮埋葬地の数は、百を越えると言われ、全てが掘り起こされたわけではないと言う。

私の祖父と母の妹も本所菊川町に住んでいたので、この時の震災で亡くなった。私はまだ生まれていなかったが、父母や姉の話を知ると市川からも東京が赤く燃えているのがはつきりと見えたようだ。翌日、父が市川から現地まで徒歩で出向き祖父たちの安否を確認したが、全く判らなかつたと言う。おそらく祖父たちもどこかの公園に仮埋葬されたのであろう。

市川学園の卒業生で詩人の鈴木比

女 正 月 仕 切 襖 を は づ し や り

原木、高谷五句

幾 何 学 の ト ラ ス 綾 な す 冬 川 原

光 風 や 市 川 沖 は 四 ノ ツ ト

春 日 差 す 塩 商 ひ の 蔵 屋 敷

春 惜 し む 荷 風 が 佇 ち し 山 門 に

橋 脚 を 洗 ふ 遡 上 の 彼 岸 潮

※一部「俳句研究」春号掲載作品

佐雄さんから、『大空襲三二〇人詩集』を送っていた。送っていた。

大変重いテーマではあるが、こうした歴史の事実を文学的遺産として後世に伝えることは大変意義のあることである。詩集には宗左近さんの『炎える母』の中から「走っている」という詩一編も収められている。

これから祖父の霊を慰めるためにも、三二〇人の詩の一つ一つを読んで行きたいと思っている。

先ほどの若い女性カメラマンも、鈴木比佐雄さんも私よりも若い方であるのに、戦争を風化させないための意義ある仕事と大きな役割を果たしていただいたことに感心した。

能村 研三



雪中梅

林 翔

駒込大観音

戦災で焼失した駒込大観音を記憶している人は、もう極めて少ないだろう。団子坂を登って本郷肴町に至る大通りの右側に、そのお寺はあった。少年期のわが家から極めて近い場所であったから、観音様の境内は私達の遊び場でもあった。

両親の躰がよかったと言っべきだろうか、目的は友達と遊ぶことであっても、先ず観音様に両手を合せて拝んでから、遊び始めたことを覚えている。

雪や雪南国生まれの棕櫚にまで
降り止んで南は溶けて春の雪
しろがねの発光体ぞ朝の白梅は
雪中に色をぞ絞る紅梅花

年に一度、二日間の御縁日には、参詣人で賑わい、屋台の店も沢山出た。蛸籠を買って帰り、蚊帳の中に蛸を放して楽しんだのが御縁日の日だと記憶するが、記憶が正しければ御縁日はその季節だったのだろう。御縁日に限り、胎内潜りが許された。観音様の裾の後方に小さな出入り口があり、そこから入る胎内潜りを私も一度だけ経験した。螺旋階段

暝らば梅林か庭の紅白梅

紅梅や古き句帳に登四郎句

梅かをり妣ははの三味線紫檀棹

戻り寒か戻り若さは無いものを

赤子への頬ずり杳し頬に木の芽

富岡夜詩彦氏 古守弓子さん逝去

梅は咲きこの世を去りし友二人

をゆっくり登って、最後に御頭脳に達したのを、子供ごころにも有難く思った。

私の家は電話局の大きな建物の裏手に在ったので、電話局が空襲の標的になったら危いと思ひ、母と二人の妹とは長野県の親戚宅に疎開し、私は荻窪の姉の家から市川中学校（現市川学園）に通動していた。私の家が空襲で焼失したのは昭和二十年五月であったが、大観音が焼失したのが三月の大空襲であったか、五月の空襲であったか、今では記憶が定かでない。浅草の観音様は池に沈めておいて救った由だが、大観音は動かすことも出来はしない。



林 翔

蒼茫集



たから箱

酒本八重

寒椿ひとり一人にある矜恃
早春の産院といふたから箱
春の風邪たまには拗ねて見たきかな
諦めることなどないよ春そこに
金粉酒余し一月行きにけり
節分の袴の君に豆打たる

微酔いろ

北川英子

凍つる夜の花束忘れあるベンチ
初雪のうすら浄めに子の新居
雪降りくる護摩の炎先のなほ猛り
あめつちの朦朧と春立ちにけり
マシユマロのつまみ加減も臍かな
ゆるゆると春月微酔いろに出づ

春の山

安居正浩

ピーナッツの殻に二つの春の山
薄氷を踏めば小さき詩の生まる
マスクしてマスクの人をいぶかしむ
煮凝に魚の夢の溶けてゐる
十本の水仙十本分さびし
仏壇に鶯笛の置いてある

跑 足

千田百里

目鼻付いて五衰はじまる雪だるま
インターネットの絡まる地球冴返る
来し方の跑だぐ足あしに似て冴返る
北開くもとより肚は決めてをり
老ゆるまじ凍星数ふ目に力
誰の肩に春愁の頭を乗せやうか

立体交差 辻 直美

三寒四温立体交差してゐたる
室咲がきて空つぼの家満たす
夫帰りませ初めての涅槃西風
次の世に首尾よく生まれ花辛夷
料峭やアイルランドの魔除け面
おしくらまんぢゅう心棒の吸引力

王蛇を抱く 辻 美奈子

抱きとる王蛇おもたし涅槃西風
永き日のうはばみ抱けばぐぐと動く
夢に父いつも病みける青木の実
たましひはあるのでせうか笹子鳴く
厳冬の重さ真珠のネックレス
水と水触れ合うてゐる春隣

語 部 荒井千佐代

高い高いすれば嬰は反る冬木の芽
本売りにて本を買ひ来しクリスマス

福音の愛・罪・罰やシクラメン
原爆の語りべ手炉に手を翳し
麦踏みに灘あり島あり空のあり
ちち恋へばちちが降らせむ春の雪

天 路 千田 敬

末黒野や飛鳥のむかし問うて佇ち
粕葉のひそめし紅や山笑ふ
鷹化して鳩となる世の電子辞書
大勢の去りて雛も面昏く
うららかや川を模したる箒あと
鳥帰る天路に磁気のありやあり

一 対 工藤節朗

正月の膝つき合はす遊びごと
一対は何にもまさる鴛鴦二つ
雪降りり手つかずの詩の無尽蔵
まだ磨き足らざる一話風花す
声かけて若水供ふ母がをり
お百度を踏みてどんどにかかはらず

潮鳴集



水平器

今瀬一博

夢生るる形にたたみ花弁餅
冬木の芽ためし負ひせるランドセル
手を逸れし風船撃つてみたくなる
ブラックチョコ斜めに割れて戻り寒
のどけしや山上湖てふ水平器

雪嶺 関洋子

雪嶺のはるかにありて名を知らず
生まじめに働き冬の冷蔵庫
みなどみらいビル群冬日分ち合ふ
市境の標識一つ過ぎて春
出土めくおはじき一つ春霞

細き溝 甲州千草

紙鍋にぽぼと揺るる火寒明るる
きさらぎや指輪ケースの細き溝
下校子の帽子横向き鳥の恋
金盞花海抱くごと網繕ひ
春隣先を競ひて樋の雨

最終便 高木嘉久

着膨れて外階段に星求む
大寒の木戸を裏より押す力
赤信号長ければある雪女郎
キューポラの街てふ昔寒の月
寒月に触れて最終便らしき

沖作品



セーターを解いて記憶に深入りす
楯の辺にあるハモニカの吹き心地
七草に洩れし草あり独り膳
ビロードの鼻緒の濡るる春の雪
湯婆のあばらに遊ぶ足の裏
もう齡重ねぬ父母へ年用意
射初め今甲矢引き絞る眼かな
嫁が君独り居の耳聴くなる
身の内の鬼を熄ます日向ぼこ
春近し猫の足跡梅紋様
寒肥うつもなきのふにはこだはらず
漢字帳に母がいつばい日脚伸ぶ
耳順とや鬼打豆の鉄火とび
春立つとシートベルトの微調整
喪つづきの二月を風の吹くことよ

神奈川

石田 静

長崎

岩永 充三

千葉

井原 美鳥

能村研三選

白鳥の羽搏きくだく鏡風
寒月の吾が影を踏む男坂
白樺や星のはぐくむ軒氷柱
待春や母真つ新な試歩の靴
あしかびや曲げることなき志
納戸神は扉の奥に寒怒濤
斜張橋早春の陽を梳きこぼす
冴返る夜間飛行の小さき灯
万葉の世も詠まれたる野焼かな
致命祭いのりは高く風に乗り
シンプルに生きて還暦冬萌ゆる
餅搗くやむかしむかしの力瘤
綿虫とぶや生命線といふ大河
小鳥来る二重瞼の孔子像
ブラジルを呼び出してゐる初電話

愛知

近藤 敏子

長崎

柿本 麗子

茨城

岡澤 田鶴

沖作品 15句選評

*
能村研三

セーターを解いて記憶に深入りす

石田 静

五・七・五という短い詩形の中で、省略を効かせながらも物語性の濃い一句である。セーターはフォーマルというより気軽な普段着の一つだが、ちよとしたお洒落も表現できる。この句今はセーターを解いているのだが、かつては愛する人に心込めて編んだセーターであったかも知れないし、あるいは普段セーターを着ていた時の様な思いであったかも知れない。たった一枚のセーターであっても記憶が一杯詰まったセーターなのである。もう着れなくなってしまうのだが、捨てる気にもなれず、解いて何かに作り直そうとしているのだが、糸糸を解く手を見つめながら昔の思い出が蘇ってきた。

射初め今甲矢引き絞る眼かな

岩永 充三

矢に取り付けられている羽は、鷲、鷹、鷹、白鳥、七面鳥、鶏、鴨など様々な種類の鳥の羽が使われているそうだが、特に鷲や鷹といった猛禽類の羽は最上品として珍重されるそうだ。鳥の羽は表裏があり、これを半分に割いて使用するため矢には二種類があり、矢が前進したときに時計回りに回転するのが甲矢(はや)であり、逆が乙矢である。甲矢と乙矢あわせて一対で「一

手」といい、射るときは甲矢から射る。弓の事始め「初射会」が開かれ、厳かな雰囲気の中、新年の願いを込めて力強く初弓を放った。

漢字帳に母がいつばい日脚伸び

井原 美鳥

この句はいろいろな解釈が出来るのが面白い。漢字帳に「母」の字を書いているのは、小さい子供と見るのもその一つ。小学生の低学年の子が、母親に手本を書いてもらい、それをノートに何度も書き記している場面が想像できる。ただ、書いている文字が「母」であるので、あまりにも常識的な光景となつてしまい面白くない。年老いた母親が、ややいろいろなことを忘れてかけていて、その記憶のリハビリの意味も含めてノートに漢字の練習をしているのかも知れない。場面としては、こちらの方が面白いのかも知れない。

白鳥の羽搏きくたく鏡 凧

近藤 敏子

白鳥は初冬に飛来するが、新潟県の瓢湖など飛来地として有名。この句では、白鳥も多く群れをなしてはおらず静かな湖に数羽が漂っていたのだろう。しっかりとその動きを的確に描写しているのだが、その静寂を突然破るかのように、鏡のように凧だ湖面を羽搏き砕いた。「鏡凧」という言葉の表現も美しく格調が高い句となった。

斜張橋早春の陽を梳きこぼす

柿本 麗子

この斜張橋は、最近長崎港を跨ぐように出来た「女神大橋」であろうか。高塔から斜めに張ったケーブルで橋桁を吊ったもので、橋自体が周りの景観と相まって構造物の美しさを見せてくれる。ライトアップされた夜景の斜張橋も見事だが、春のうらかな日に梳かれた橋のケーブルの一本一本の姿も何かやさしさがある。